

## 資料組織法の現在

渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)

### 0. はじめに

司書の専門性と資料組織化

「資料と人を結ぶ」専門性のコアの一つ

目録作成の変容 (標準化、ネットワーク化、アウトソーシング)

「日常の作業」から離れて、必要な知識は何か？

変革の時代：図書館目録をめぐる動向と議論の焦点を紹介

変革が求められる背景 (インターネットと目録)

目録サービス (OPAC)

目録法 (目録規則など)

目録作成 (書誌コントロール政策など)

### 1. インターネットの時代と図書館目録

目録にとってのインターネット<sup>1</sup>

- ・最初は「福音」(20世紀?)
  - ・書誌データ流通環境の大きな改善 (作成面でも、利用面でも)
  - ・ネットワーク情報資源への拡張 (「サブジェクト・ゲートウェイ」など)  
難しい挑戦だが「障地拡大」の希望も
  
- ・いつしか「危機」(21世紀?)
  - ・情報の生成・流通・消費活動の大きな変化 (単なる「効率化」ではない)  
図書館・図書館目録も影響を受けざるを得ない
  - ・ネットワーク情報資源の爆発的増大  
目録の拡張 (ネットワーク情報の目録) による対応は不能  
「検索」がウェブ世界のカギに  
検索エンジン + 様々な情報探索手段
  - ・「メタデータ」の爆発的増大  
ネットビジネスに欠かせないもの (商品情報)  
書籍等についても (Amazon、出版社)
  - ・Web2.0: シームレスな情報流通とシステム連携  
外部の情報を柔軟に取り込めるシステムに価値  
外部で柔軟に使ってもらえるデータに価値
  - ・「情報検索」「メタデータ」における図書館の「障地縮小」

<sup>1</sup> 渡邊隆弘「書誌コントロールの将来をめぐる論点：LCのWG報告書とわが国での検討状況から」  
『情報の科学と技術』58(9)2008.9. p.430-435 \*CiNiiで全文一般公開

### 「目録の危機」論議

- ・ 2005 年ごろから、米国の研究図書館界を中心に
- ・ 目録の相対的な地位低下：利用の減少とカバー率の減少
- ・ (他のさまざまな検索サービスと比較して) 進歩のない OPAC への不満
- ・ 作成・維持のコスト： 基本的に人力のデータ作成
- ・ 書籍の大規模デジタル化

### 今後の目録に求められるもの

- ・ 「付加価値性」  
他のシステムとの競争 (差別化) のために
- ・ 「開放性」  
他のシステムとの連携のために
- ・ 一方で、コスト削減圧力

## 2. 「次世代 OPAC」の動向<sup>2</sup>

### 「次世代 OPAC」の探求

- ・ 米国を中心に 2006 年ごろから続々と
- ・ 「次世代」というコトバ

#### C.R. Hildreth の OPAC 世代論 (1984)

第一世代 (当時でも古い ~ 1970 年代)	カード目録の模式
第二世代 (当時の主流に 1980 年代)	キーワード検索、ブール演算
第三世代 (次世代)	典拠によるアクセス、フリーテキストと統制語検索の統合、日常語による探索表現、個別的な注文に応じた表示、内容に応じた自動エラー訂正・ヘルプ表示、提供データの拡張 (抄録/索引、多数・多種のデータベースとの連結)

こうした見通しが「絵に描いた餅」のままで OPAC は長らく停滞

反省の上になった試みの総称が「次世代 OPAC」

現在は、標準的な機能が収斂されつつある段階

### 次世代 OPAC で重視されている主な機能

- ・ いくつかの背景  
Google に学ぼう、Amazon その他にも学ぼう  
ウェブ環境下にある利用者の期待に沿ったユーザビリティ  
図書館目録の伝統資産を再生しよう  
図書館目録の持つ付加価値性をアピールできるシステム

<sup>2</sup> この項の話は、こちらをもとにしています。

渡邊隆弘 「「次世代 OPAC」への移行とこれからの目録情報」『図書館界』61(2), 2009.7. p.146-159

次世代 OPAC の諸機能については、以下のものもわかりやすく参考になります。

工藤絵理子, 片岡真 「次世代 OPAC の可能性 その特徴と導入への課題」『情報管理』51(7), 2008.10. pp.480-498 \*J-STAGE で全文公開

久保山健 「次世代 OPAC を巡る動向：その機能と日本での展開」『情報の科学と技術』58(12), 2008.12 pp.602-609 \*CiNii で全文公開

よくみられる機能

(1) 簡略な検索画面	Google ライクのシンプルさ
(2) キーワード入力補助	スペルチェック、自動修正、先読み候補表示など
(3) 関連キーワードの視覚化	タグクラウドなど
(4) レlevance ランキング	入力語に関連度の高いものから表示
(5) 書誌情報の拡張 ( 増強 )	書影、目次、内容紹介など
(6) ファセット型ブラウジング	絞り込み用のメニューを様々な「視点」から表示
(7) FRBR 化表示	様々な「版」をまとめて、「著作」単位に構造化した表示
(8) 利用者による情報入力	タグ、コメント、レビューなど
(9) レコメンデーション	Amazon 流の「おすすめ」
(10) 他の DB との統合検索	各種電子情報資源とシームレスに

日本における次世代 OPAC

- ・他地域とくらべ大きく立ち遅れ  
日本語対応、独自の書誌フォーマット、ドメスティックなシステム状況
- ・2010 年に入り、ようやく本格導入例  
慶應義塾大学 KOSMOS      Ex Libris 社 Primo      (2010.3)  
筑波大学 Tulips              リコー LIMEDIO      (2010.3)
- ・「国立国会図書館サーチ」(開発版) 2010.8.17 ~

目録データの外部開放：もう一つの目録サービス

- ・RSS、Web API ( Application Programming Interface ) によるデータ公開  
特定条件に合致するデータを機械可読形式 ( 通常は XML ) で出力  
人間に検索させるのではなく、コンピュータに利用させるサービス
- ・システム、データの存在をアピール：Google や Amazon では競争力の源泉の一つ
- ・目録データの視認性、利用可能性を拡大  
検索システムだけではなく、データの付加価値性をアピール

図書館外での注目

- ・最近では「カーリル」  
全国の公共図書館の所蔵検索を単一システムで。Amazon との連携
- ・「外部開放」によってもっと進むはず
- ・一方で、図書館目録の付加価値性をどこに見出すか？

### 3. 目録規則の変革<sup>3</sup>

#### 目録規則の動向

- ・ 1960～1970年代に確立された大きな枠組みのなかで
- ・ 1990年代後半以降の活発な改訂は2000年代半ばまでに一段落  
ISBD (国際標準書誌記述)、AACR2 (英米目録規則)、NCR が順次改訂  
改訂は、主に特定の章<sup>4</sup>
  - 「電子資料」: リモートアクセス資料への対応など
  - 「継続資料」: 「逐次刊行物」から適用範囲を拡張
- ・ 『日本目録規則 1987年版改訂3版』(NCR87R3)  
2006年刊行 (実質改訂は2005年)  
第13章「継続資料」(旧「逐次刊行物」)  
逐次刊行物 + 更新資料 (WWWページ、加除式資料など) = 継続資料  
タイトル変遷の規定を見直し (「重要な変化」と「軽微な変化」)  
第2章「図書」、第3章「書写資料」  
和古書・漢籍に関する規定 (はじめての本格的な標準化)

#### より抜本的な見直しへ

- ・ 全体を抜本的に見直す必要: 章ごとの改訂ではもはや限界  
= カード目録時代の枠組みからの脱却  
インターネットの時代に: 「付加価値性」と「開放性」

対象資料の変化への対応 (主にデジタル化、ネットワーク化)

「資料種別」による章立てに限界

資料の「コンテンツ」(内容的側面)と「キャリア」(物理的側面)

情報組織化環境の変化への対応 (主にデジタル化、ネットワーク化)

「記述」だけでなく、「標目」も抜本的に

「次世代 OPAC」にも: 目録データの付加価値性の向上

メタデータの相互運用性 (Interoperability)

目録データの開放性の向上 (他のコミュニティにも使ってもらえるデータ)

1997	FRBR (書誌レコードの機能要件) 今後の目録の基礎となる「概念モデル」
2003～	IFLA「国際目録原則」の策定作業 「パリ原則」(1961)に代わる新しい原則として、2009.2完成
2003～	AACR (英米目録規則) 抜本改訂作業 RDA (後述) という新しい名称になって、2010.6完成
2007～	ISBD (国際標準書誌記述) 改訂作業 全資料種別を網羅した「統合版」として近く完成予定

<sup>3</sup> 渡邊隆弘「目録法の再構築をめざして」『図書館雑誌』103(6), 2009.6. p.376-379

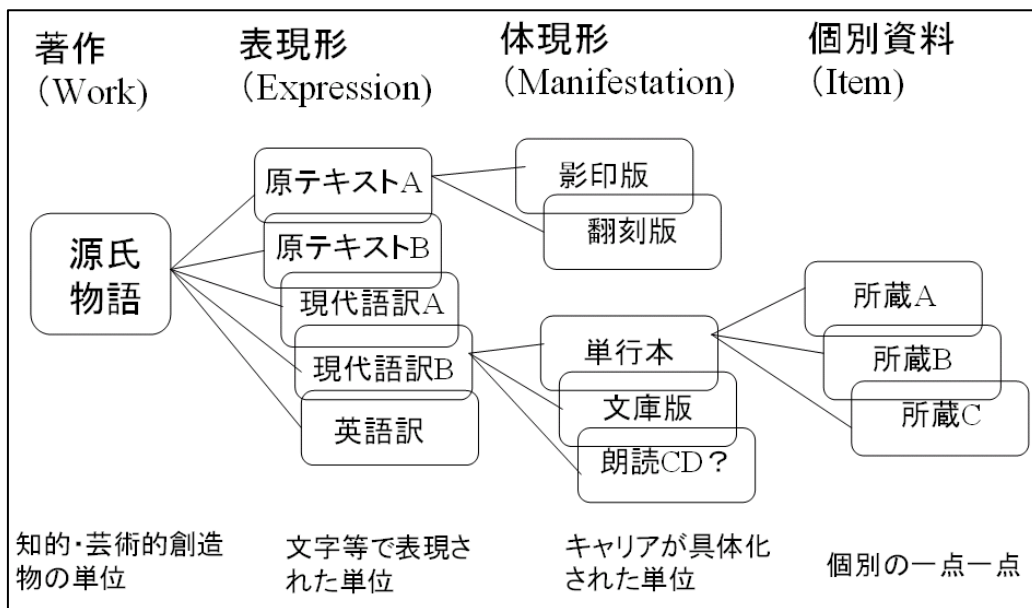
<sup>4</sup> 以下の図書が背景や問題点を知るのによい。ただし、いずれも NCR 改訂案段階での検討会記録であり、NCR の条項細部は最終版と異なっているので注意。

日本図書館協会目録委員会編『電子資料の組織化』日本図書館協会, 2000

日本図書館協会目録委員会編『継続資料と和古書・漢籍の組織化』日本図書館協会, 2005

FRBR (書誌レコードの機能要件)<sup>5</sup>

- ・今後の目録規則の基礎になる枠組み
- ・Functional Requirement for Bibliographic Record (IFLA 1997)
  - 「書誌的世界」の「概念モデル」・・・「実体関連モデル (E-R モデル)」
  - 「実体」「属性」「関連」で情報を整理
  - 書誌レコードの各項目は何のためにあるのか？を考え直す
- ・資料を4段階の枠組み (抽象 具体) で把握： 4つの「実体」
  - 「著作 (Work)」・・・知的・芸術的創造物の単位
  - 「表現形 (Expression)」・・・文字、音声等で表現された単位
  - 「体现形 (Manifestation)」・・・キャリアが確定し、具体物となった単位
  - 「個別資料 (Item)」・・・個別の一点一点
- ・これまでの「著作」と「版」の考え方を発展
  - 「コンテンツ」と「キャリア」(内容的側面と物理的側面)の問題
  - 「表現形」を新たに設定して整理
- ・さらに「個人」「団体」「家族」「物」「出来事」「場所」「概念」との関係
  - 著者名典拠や主題情報にあたるもの： 典拠情報の重要性



<sup>5</sup> 和中幹雄ほか訳『書誌レコードの機能要件』日本図書館協会, 2004.3. 121p  
WWW 版全文 <http://www.ifla.org/files/cataloguing/frbr/frbr-ja.pdf>

RDA : AACR2 (英米目録規則第2版)の後継規則

- Resource Description and Access (資源の記述とアクセス)
- 2010.6 刊行
  - 2003 年以降、「AACR3」改訂の活動
  - 紆余曲折の中で、名称も変更
- コンセプト : デジタル世界のためにデザインされた新たな標準
  - あらゆる内容 / 媒体の情報資源に対応 (柔軟性と拡張性)
  - データベース環境 (情報組織化環境) の変化に対応 (効率性と柔軟性)
  - 図書館中心だが、他のコミュニティとの接合も
  - 従来目録法との継続性も意識 (伝統の基礎の上で、FRBR モデルの適用)
- 従来規則とは全く異なった構成
  - これまでの目録規則の構成

記述の部 総則、図書、地図、... (資料種別ごとに章立て) アクセスポイント (標目) の部 選定に関する規則 統一標目の形式に関する規則 (個人、団体、統一タイトル...)
--

RDA の構成 (FRBR に密着)

<p><b>セクション1: 体現形および個別資料の属性</b></p> <p>1章 一般的ガイドライン                  2章 体現形および個別資料の識別                  (タイトルをはじめ、従来記述の中心部分にあたる)                  3章 キャリアの記述 (従来形態事項にあたる)                  4章 取得とアクセス情報の提供</p> <p><b>セクション2: 著作および表現形の属性</b></p> <p>5章 一般的ガイドライン                  6章 著作および表現形の識別                  (従来統一タイトル等にあたる)                  7章 著作および表現形の付加的属性の記述</p> <p><b>セクション3: 個人、家族、団体の属性</b></p> <p>8章 一般的ガイドライン                  9章 個人の識別 (従来個人標目にあたる)                  10章 家族の識別                  11章 団体の識別 (従来団体標目にあたる)</p> <p><b>セクション4: 概念、物、出来事、場所の属性</b></p> <p>12~16章                  *16章(場所の識別)以外は、刊行後に展開予定</p>	<p><b>セクション5: 著作~個別資料の間の主要な関連</b></p> <p>17章 一般的ガイドライン</p> <p><b>セクション6: 資料と個人、家族、団体との関連</b></p> <p>18~22章 (従来「標目の選定」にあたる)                  *一般的ガイドラインと著作~個別資料の4章</p> <p><b>セクション7: 主題の関連</b></p> <p>23章 刊行後に展開予定</p> <p><b>セクション8: 著作~個別資料の間の関連</b></p> <p>24~28章 (「その他の関連」にあたる部分)                  *一般的ガイドラインと著作~個別資料の4章</p> <p><b>セクション9: 個人、家族、団体の間の関連</b></p> <p>29~32章 (典拠レコードの「をも見よ参照」にあたる)                  *一般的ガイドラインと個人・家族・団体の3章</p> <p><b>セクション10: 概念、物、出来事、場所の間の関連</b></p> <p>33~37章 刊行後に展開予定</p>
--	---

• RDA の特徴

FRBR に密着、典拠コントロールの重視、機械可読性の向上、...など

#### 日本目録規則 (NCR) の動向

- ・ 201X年版? (方針検討に着手。まだスケジューリングまでは確立していない)  
全国図書館大会奈良大会 (2010.9) 分科会で、現時点での方向性を提示の予定

##### 第13分科会 目録 新時代の目録規則へ向けて

図書館の外に膨大なネットワーク情報資源が存在し、Google や Amazon に代表される様々な検索システムが身近なものになった現在、図書館目録はどこにアイデンティティを見いだしていくべきなのでしょうか? そうした問題意識のもとに、図書館目録の変革を目指す議論が近年活発に行われています。

「目録の変革」には、OPAC の検索機能の改善や目録業務・書誌情報流通の再構築など様々な側面がありますが、書誌情報の基盤となる目録規則の抜本的見直しも重要です。海外では、FRBR (書誌レコードの機能要件)、「国際目録原則」、RDA (英米目録規則の後継規則) など、大きな動きが進んでいます。日本目録規則 (NCR) 1987 年版も、章ごとの手直しを行う改訂ではなく、抜本的見直しによる「201X年版」に向かわなくてはならないと目録委員会では認識しています。

本分科会では、目録規則見直しの背景や海外動向を整理するとともに、NCR「201X年版」に関する現時点での目録委員会の考えを明らかにし、参加の方々との意見交換や情報共有を行いたいと考えています。

#### 4. これからの目録作成と書誌コントロール政策<sup>6</sup>

米国議会図書館「書誌コントロールの将来WG」報告書 “On the Record” (2008.1)<sup>7</sup>

- ・ 外部データの活用による目録作成の効率化  
出版流通段階のメタデータをもっと利用
- ・ 目録作業に関わる協働の推進  
議会図書館だけに任せず、責任の分散化
- ・ ユニーク資料 (貴重コレクションなど) の組織化に注力  
通常の図書に関わる作業を効率化して
- ・ 典拠コントロール作業の重視  
書誌記述に関わる作業を効率化して

「国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針 (2008)」(2008.3)<sup>8</sup>

- (おおむね5年間を対象期間とする方針)
- ・ データの開放性、情報検索システムの機能向上
- ・ 多様な情報源へのシームレスなアクセス
- ・ 書誌データの有効性を高める見直し (構造、標準など)
- ・ 作成の効率化・迅速化、外部資源の活用  
2009年1月から、民間MARCデータを利用  
(書誌記述のみ。典拠・主題作業は従前どおり)

<sup>6</sup> 注1) 「書誌コントロールの将来をめぐる論点」

<sup>7</sup> 日本語訳 (NDL): <http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/kokusai.html#01>

<sup>8</sup> <http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/kihon.html>

- ・最新情報：「国立国会図書館の書誌サービスの新展開 (2010.6)」<sup>9</sup>  
統合探索サービス (「国立国会図書館サーチ」)、国際展開 (OCLC 等を通じて) など

NII「次世代目録所在情報サービスの在り方について (最終報告)」(2009.3)<sup>10</sup>  
(国立情報学研究所「次世代目録WG」による次世代NACSIS-CAT検討)

- ・データ構造を中期的に見直し
- ・電子情報資源に対応する仕組み  
目録DBとは別に「電子情報資源データバンク」を
- ・外部の書誌データをもっと活用  
例えば、民間MARCを今以上に活用
- ・共同分担目録方式の「最適化」  
一定程度の集中化：「目録センター館」構想のアイデア  
インセンティブモデルの導入も検討の余地

国内書誌データの「一元化」? (別紙)

- ・JLA「我が国を代表する書誌データの一元化について」(2010.2)
- ・NDL「日本全国書誌の在り方に関する検討会議」(2010.3)
- ・NDL「公共的書誌情報基盤に関する実務者会議」(2010.8)

今後のデザイン

- ・効率化要請の中で、「付加価値性」「開放性」をどう担保していくか

## 5. おわりに

---

<sup>9</sup> [http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/bib\\_newsletter/2010\\_2/article\\_01.html](http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/bib_newsletter/2010_2/article_01.html)

<sup>10</sup> [http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/project/catwg\\_last.html](http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/archive/project/catwg_last.html)